

氏名	イム 林	デ 大	ヨン 永
学位の種類	博士（美術）		
学位記番号	博美第361号		
学位授与年月日	平成24年3月26日		
学位論文等題目	〈論文〉現代的生活空間と漆の造形性－新たな変わり塗り技法による韓国 伝統美の新解釈－ 〈作品〉・神秘の中にⅠ・神秘の中にⅡ・神秘の中にⅢ		
論文等審査委員			
（主査）	東京芸術大学	教授	（美術学部） 三田村 有 純
（論文第1副査）	〃	准教授	（ 〃 ） 片 山 ま び
（作品第1副査）	〃	〃	（ 〃 ） 小 椋 範 彦
（副査）	金沢美術工芸大学	教授	山 村 慎 哉
（ 〃 ）	多摩大学	講師	井 谷 善 恵

（論文内容の要旨）

自然と人間は、分離して考えることの出来ない存在であり、多くの芸術が自然を根源として存在してきた。人間は自然生活の中でより多くの休息と安定感を得るために、自然のなかに希望を求めてきた。その結果として、自然を生活空間に表現しようとする欲求が高まった。このことは生活空間に対する認識の変化を促し、我々の生活空間は機能的であるばかりではなく、人間の神秘への憧れと美的欲求を満たしてくれる空間へと変える原動力ともなったのである。

また、自然の木から採取される液体の物質である漆は、日本では9000年前の縄文時代から使用しはじめ、各種の漆工芸技法は平安時代に完成されたといわれている。漆塗りは、国によって独特の技法を持っており、例えば日本の蒔絵、中国の彫漆、韓国の螺鈿などが挙げられる。しかし、なかでも日本は多くの技法を応用しながら漆芸を発展させ、その中で変わり塗り技法も生まれたのである。その漆工芸品は人間の生活空間を考慮し、視覚的楽しみと精神的豊かさ、快適な生活空間を与えてくれると考えられる。また、漆工芸品は、自然の塗料である漆を使用することで、生活空間に対する安定感や神秘的感情、美的欲求を満足させてくれるものになると考える。

そこで本研究では、人間にとっての自然と生活空間について考察し、人間社会に休憩と安定感を提供する自然の線を想起させる韓国の伝統建築の屋根の流動的な線と、柔らかな曲線の美しさについて理解し、この韓国の伝統建築の流動的曲線のイメージを、筆者の研究領域である変わり塗り技法を用いた作品によって表現することを研究目的とした。

本論文は、4章で構成されている。

第1章「空間構成要素と装飾（家具）に関する一般的理解」では、空間構成の基本的な要素を壁や柱などの垂直的要素と床や天井などの水平的要素に分類し、空間構成の要素を壁、柱、床に範囲を限定し、その意味と機能を理解し、それぞれを表現ということに結びつけ、その特徴を把握した。また、装飾（家具）に関する理論的考察として、まず、空間の構成要素である壁、柱、床の意味と機能を把握した上で、装飾（家具）の意味と、装飾品の分類およびその種類を調べて論じ、工芸と室内装飾の連関性を理解することを目的とした。

第2章「表現性の意味」では、美的な表現として韓国の伝統建築が持っている造形的特徴を参考文献

に依りつつ明らかにし、これを応用した幾つかの作品を通して自作品への理解を深めようとした。また、「線の定義と特徴」という節においては、造形要素としての線に関する考察を行った。

第3章「生活空間での自然性表現と変り塗り技法の役割」では、筆者が1989年から2010年までに制作した作品は変り塗り技法を中心的に用いて、自然の現象をイメージ化しようと試みたものである。人間の生における違和感を解消し、芸術性と環境への適合性を共に備えた漆装飾品（家具）を制作することによって、生活の質の向上と安定感を高めることを目指した。伝統的変り塗り技法と現代的変り塗り技法の相関的な表現方法の特徴について事例を通じて分析した。

現在、韓国の伝統建築の外形的な造形美は現代の作品制作において素材として応用され、多様に研究されており、筆者は、韓国の伝統建築から屋根線の造形性に注目し、ヨンマルや軒線を漆作品で応用し、変り塗り技法を用いて表現してきた。また、韓国の伝統建築が持っている固有の線の美を求め、その美しさに接近し過去と現代を連結する橋梁的な要素を探し求めると同時に、我々の情緒に生命力と豊かさを与えてくれる現代の漆とデザインの効果的な結合を模索した。

筆者は、人間は自然を通じて自分の存在を認識し、自然の法則に従って生きる存在であるという考えを基に、漆作業を始める当初、自然の中にある色々な美しい形態と、韓国の韓服の中にある線を主なモチーフとし、その線を適切に使用しながら美しい作品を作ることを目的とした。また、漆塗りの中で、螺鈿や蒔絵の技法より、変り塗り技法を用いたほうが作家の表現する自然のイメージと作品の成果をより高めると考え、そのため変り塗り技法を用いるようになった。

今後は、天然素材からなる漆工芸作品の制作を通し、現代の生活感覚に相応しい、多様でかつ独特な表現技法を持つ漆による新しい造形の可能性に追求していくと共に、現代の生活空間の装飾品としても多く活かされるように漆のデザインも持続的に研究し、漆制作の活性化が促すことを課題とする。

(博士論文審査結果の要旨)

豊かな広がりをもつ日本の漆芸技法なかでも「変り塗り」は日本の風土に育まれた固有色の強い技法である。林大永氏は螺鈿漆器を誇る韓国からの留学生であるが、この日本の伝統を新たに韓国で根付かせようという心意気をもった人物である。

氏の学位申請論文は、ともすれば随想めいた記述に陥りがちな実技系博士論文にあって、愚直なまでに自作の造形原理を論証、定義、位置づけようとする態度を貫いた点において優れている。

第1章では、空間を構成する床や天井、その内に置かれる家具や工芸などの関係性を先行研究にもとづいて考察を行っている。先行研究に負う部分も少なくはないが、小結として「機能は形態に従う」という著名なルイス・サリヴァンの論理とは逆に、装飾と形態こそを主とする空間造形を学位申請作品において目指したと記し、デザイン史上での自作の意味づけを行った点で注目すべきであろう。

第2章では、朝鮮時代の伝統建築の屋根や、現代建築や工芸の線の魅力を自分の言葉を選びつつ論じている。いかなる造形を求めるかについては作家ごとに異なるが、結論として、コンパクトに自然のイメージを伝えること、また安定感と憩いを与えることを挙げている。自らの求める造形を言葉で伝えることには困難がつきまとうが、具体的な作品を挙げつつ第三者にも理解しやすい記述としており、本論のなかで最も好ましい部分となっている。

第3章では、論者のライフ・ヒストリーとともに学位申請作品について論じている。結論として変り塗りは技術習得が比較的容易で、さらにイメージをダイレクトに表現できるという特色と、それゆえの可能性を指摘している。欲を言えば、造形を生み出す思考プロセスや、変り塗り技法への思いを今少し深く論じてほしかったが、時間を置くことによって思考が深まることと思われ、後日に期待したい部分である。

以上のように、林大永氏の論文は、日本や韓国にとどまらず、大局的なデザイン史まで含めた視点から自作を位置づけようと努力し、さらには変り塗りという日本の伝統を韓国の地で根付かせようとする

自身の決意表明とも言える。その意味で本論文は、日本と韓国漆芸の新たな時代の可能性を予測させるものであり、今後、さらに重要性を増していくことと思われる。評者は、その可能性の豊さをもって本論文を博士学位授与にふさわしいものと評価したい。

(作品審査結果の要旨)

作品のイメージソースとして韓国の伝統建築を念頭に屋根、柱から形成された線を一つの形に統合している。屋根、軒等の美しく柔軟であり、また張りのある曲線の複合体から本申請者はフォルムを追求し、オブジェへの昇華である。形体は屋根を流れる水滴を想像させる。

変り塗り技法は江戸時代には鞘塗りと言われ、刀の鞘、印籠等に多様な材料を用い様々な漆塗り装飾表現を創案し、ある種ファッション化した時代であった。

本申請者の9年間の変り塗りの研究期間を費やした経験をもとにあらたに独自の変り塗り技法の研究と現代の生活空間の中における装飾の可能性を追求した本提出作品は評価に値する。

発泡スチロールを切削し形体を見出し、のり漆で麻布を貼り重ねる乾漆技法で本体を形成し、オブジェとしてだけではなくスリット部からもれる光が天井、壁へと反映し照明器具を兼ねた造形作品は、現代的生活空間の中で効果的であろう。

3点の大きな形体を造形し全体を覆う変り塗り技法はそれぞれ違った表現がなされ、変り塗りの効果としては弱い存在感のある作品に仕上がっている。

漆芸の新しい分野の可能性を感じさせる作品であり高く評価できる。また研究熱心な姿勢を持つ本申請者はこれからの韓国漆芸を担っていく人材であると考え。よって博士学位授与にふさわしいと判断する。

(総合審査結果の要旨)

本申請者の林大永氏は、韓国において、学部、修士と自然を見つめながら、自然界が作り上げる造形美をもとに作品を作り続け、発表をしてきた。特に韓国の人々が着ていた韓服に風をはらんだ服装からイメージを受けた形は、直線と曲線の要素が混ざり合い、観る人に豊かな感性を与えるものである。日本に留学し、金沢美術工芸大学において、江戸時代から伝わる百工比照などの変り塗りの表現研究を始め、輪島の漆芸研究所において、更なる実証研究に励んできた。

本学に進学してからは、乾漆による小さな小箱を作り、その上を独自に研究を重ねてきた変り塗り技法で完成させ、東京やソウルなどで個展を行い、高い評価を得てきた。

その中で造形のもとを韓国の古建築の持つ反りのある形の意味性を研究し、乾漆による造形物を作り、研究開発した変り塗り技法で装飾した作品が、今回の発表作である「神秘の中に」シリーズである。この作品は空間におかれる造形物としての存在を持つだけでなく、中に光源を入れるとそのスリットから出てくる光と影が壁や天井に映り込む世界をも、考えて造形されている。

本作品とともに提出された論文は、韓国における古建築の持つ線の意味、造形の妙を研究し、各種文献を読み解き、1章、2章と論を進めている。変り塗りについては3章にて歴史と自分が開発した技法について詳述をしている。漆は多くの可能性を秘めているがゆえに、今後も作家によって新たな変り塗り技法が生み出されるだろうことを暗示している。

提出された作品と論文は共に高い水準に達しており、バランスが取れて、審査委員からの評価は高く、博士号の学位取得者として、本学のこれから続く漆芸領域の模範となるものである。

林大永氏は韓国と日本の修士号を取得し、その上に本学の博士号を取得することで、日本と韓国のみならず、今後は広く世界においての漆芸作家、指導者として活躍できうる人材である。